福島県立博物館紀要　第32号　2018年３月　p. 83－92

研究ノート

信夫山頂遺跡出土品の研究（６）

時枝　務*・高橋　充**

これまでの（１）～（５）の内容は以下の通りである。

はじめに
１．信夫山と遺跡の概要
２．出土品の伝来と研究状況
３．出土品の概要
４．資料の紹介
（１）仏像
（２）仏具　　以上（１）紀要25号
（３）鏡
（４）馬具
（５）武器
〈付論１〉鏡の照合について
以上（２）紀要26号
（６）錠
（７）金具類
〈付論２〉信夫山羽黒権現の鐘銘について
以上（３）紀要27号
（８）提子
（９）銅製容器
（10）銅製吊手
〈付論３〉「塔寺八幡宮長帳」記事について
以上（４）紀要28号
（11）銭貨
〈付論４〉御山村絵図について
以上（５）紀要31号

本稿（６）は、「４．資料の紹介（11）銭貨」の続きで、本文および図版の作成は時枝が担当した。図・表の番号は、前号からの通し番号である。

信夫山に関連する資料を紹介する〈付論５〉は、高橋が担当した。

（11）銭貨（承前）

信夫山頂遺跡出土銭貨のおもなものについて、拓影を図版18～21として掲示する。

拓影は、湿拓の方法により、保存状態の良好なもの、特色のあるものを抽出して採拓したものである。特色のあるものとしては、刻目をもつもの、被熱して変形したものなどがある。拓影は、基本的に表裏面とも掲示したが、五銖銭を連想させる形態のものの一部は、裏面に特色がないため、表面のみの掲示である。掲載順は、基本的に前回報告した表２に従ったが、作図の都合で必ずしもそうでないものもある。縮尺は、原寸大が望ましいが、紙面の都合で２分の１縮小とした。

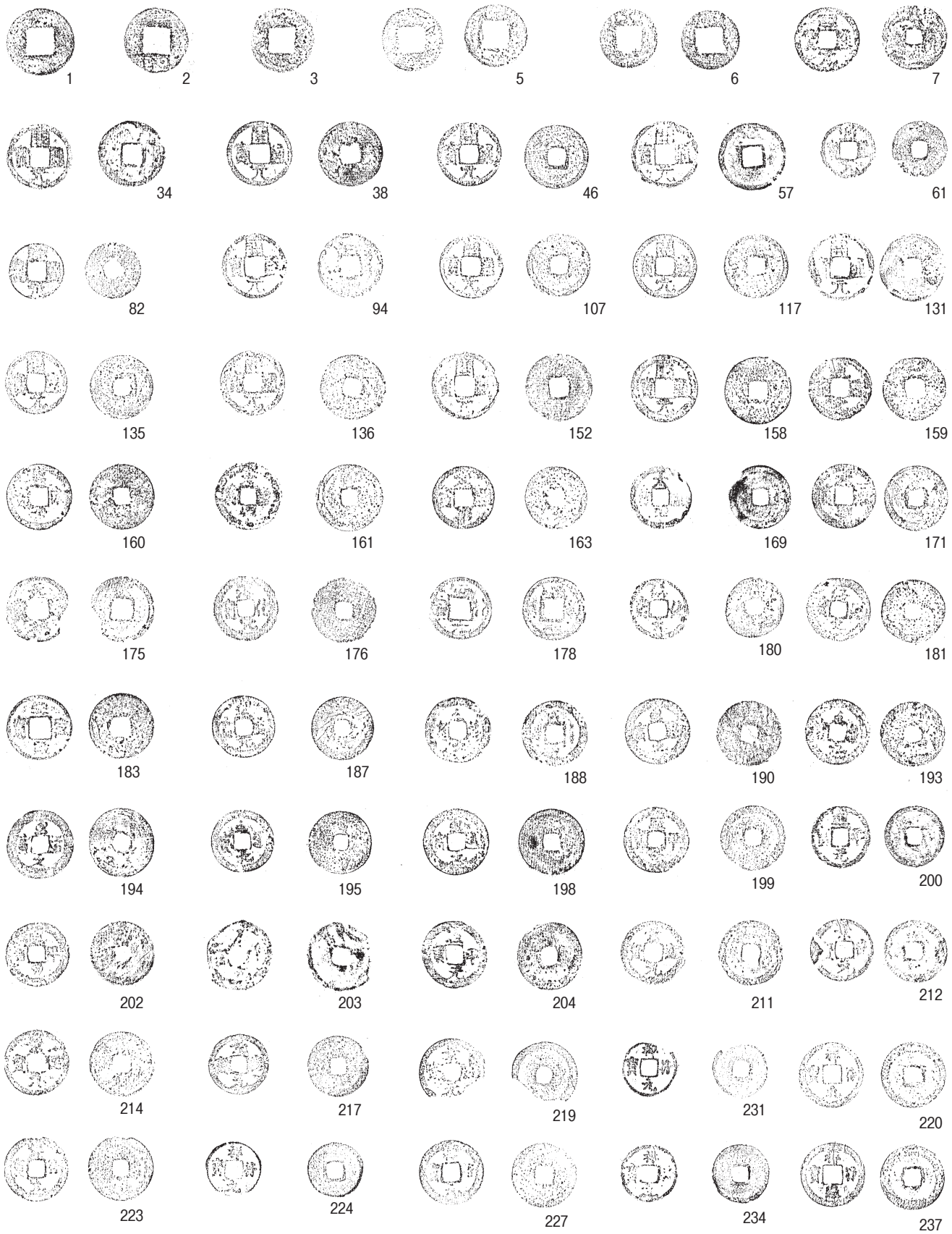
表２の367は、治平元寶として報告したが、拓影を観察すると治平通寶であることがわかったので、367の銭名を治平通寶と訂正する。したがって、治平元寶は１枚減って３枚となり、新たに治平通寶（北宋・1064年初鋳）１枚を追加することになる。

また、584の大康元寶は、備考欄に「銭名検討の余地残る」としておいたが、拓影の観察から「大」の字が「天」の可能性が高いことがわかり、最終的に天聖元寶と判断した。したがって、大康元寶はなくなり、天聖元寶が1枚増えて34枚となった。

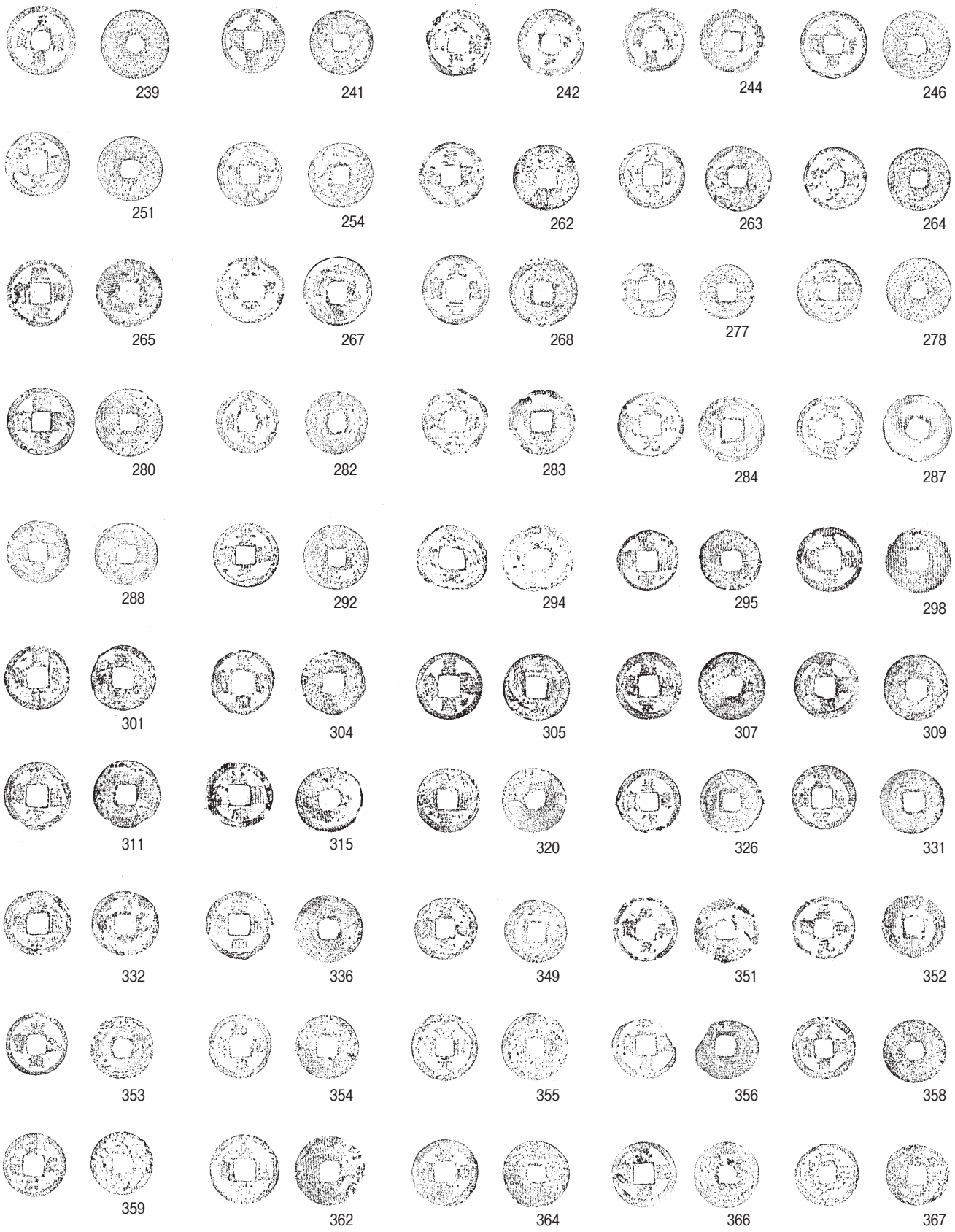
結果的に、１銭種の増加があったが、１銭種減ったため、銭種数に変化はなかった。

なお、表２の220の備考欄の内容は、本来219に記載すべきものであった。ここに訂正し、不備をお詫びしたい。

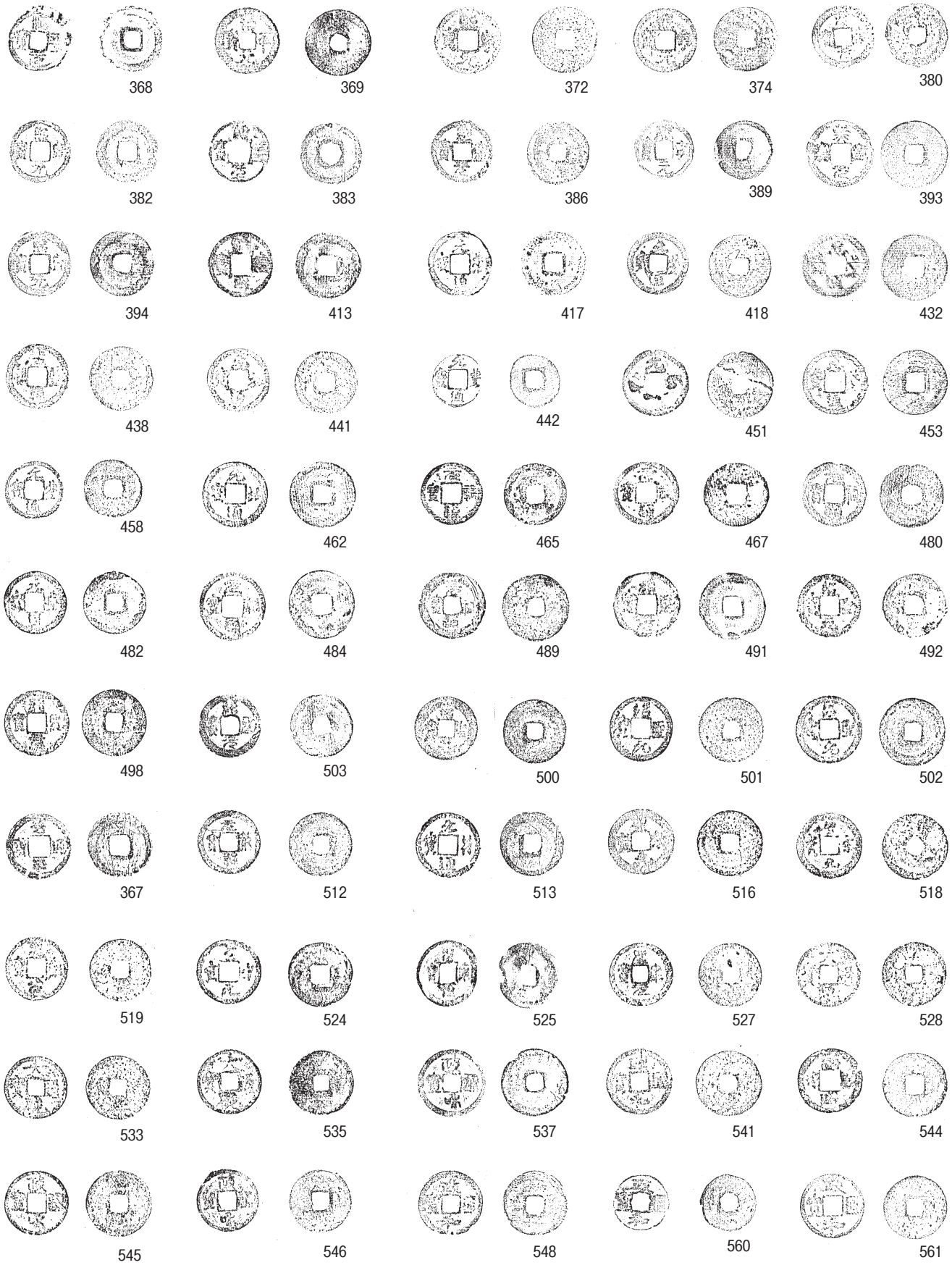
*立正大学，**福島県立博物館



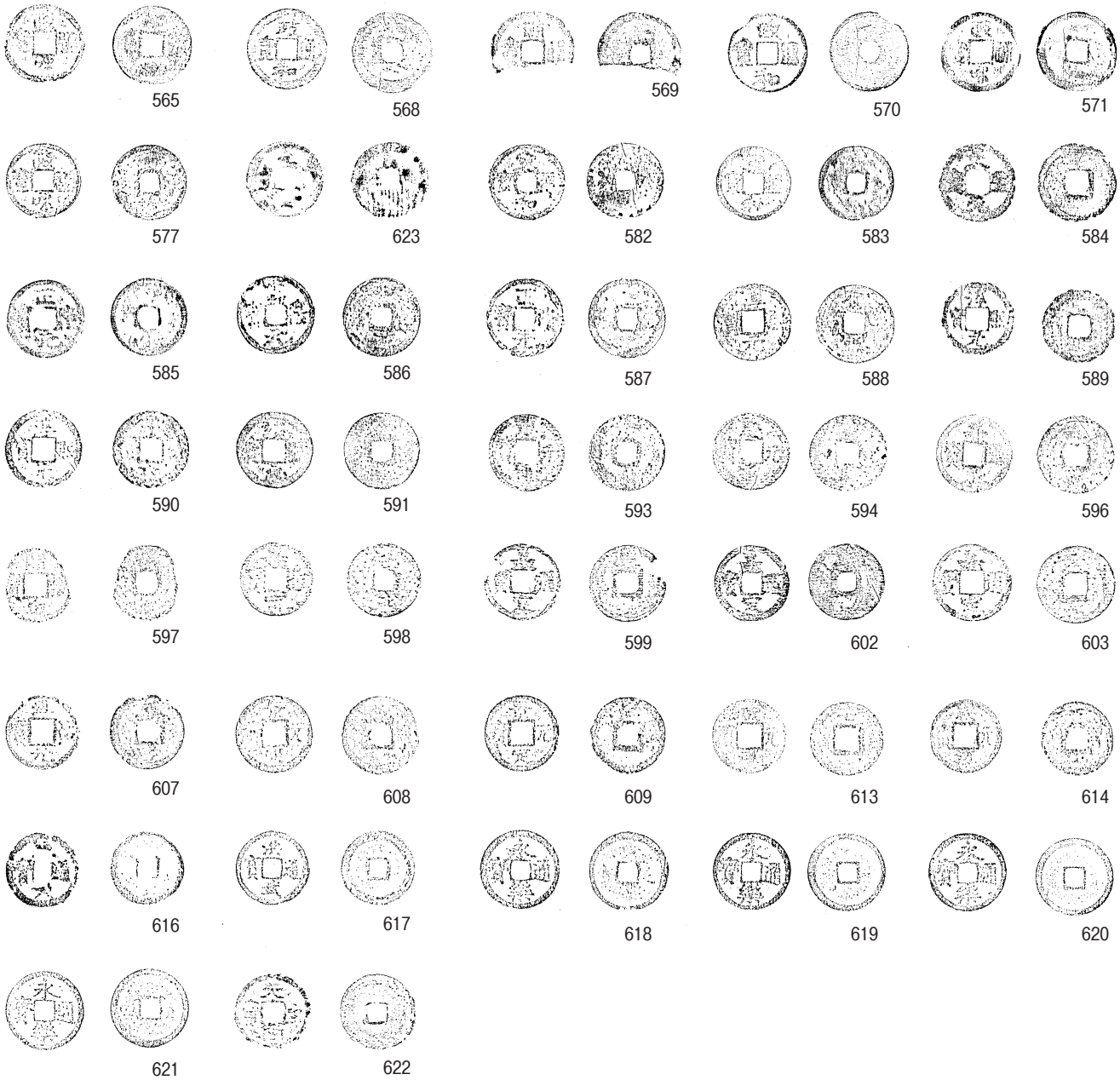
図版18　信夫山頂遺跡出土銭貨拓影（１）
（２分の１縮小、数字は表２に対応）



図版19　信夫山頂遺跡出土銭貨拓影（２）
（２分の１縮小、数字は表２に対応）



図版20　信夫山頂遺跡出土銭貨拓影（３）
（２分の１縮小、数字は表２に対応）



図版21　信夫山頂遺跡出土銭貨拓影（４）
（２分の１縮小、数字は表２に対応）

〈付論５〉「貞山公治家記録」慶長５年10月６日条について

「貞山公治家記録」（以下「治家記録」）とは、初代仙台藩主となった伊達政宗の事跡を編年体でまとめた記録である。４代藩主綱村の命を受けて編さんされ、元禄16（1703）年に完成した。「治家記録」巻二十下、慶長５（1600）年10月６日条は、当時、上杉景勝領内にあった福島城を伊達政宗の軍勢が攻撃したことを記すが、その中に信夫山（羽黒山）に関する記事が数ヶ所見られる。今回は、それらの記事を紹介するが、「治家記録」が江戸時代の編さん物であることから、とくに、その編さん材料となった文書や記録に留意しながら検討したい。

１）慶長５年10月の政治状況

まず、この時期の政治状況を概観しておこう。

信夫山を含む陸奥国信夫郡（信夫庄）には、15世紀以後、北に隣接する伊達郡を本拠とする伊達氏が進出した。天正12（1584）年、伊達氏の家督を相続した政宗は、それを受け継ぎ、この地域を支配下に治めた。

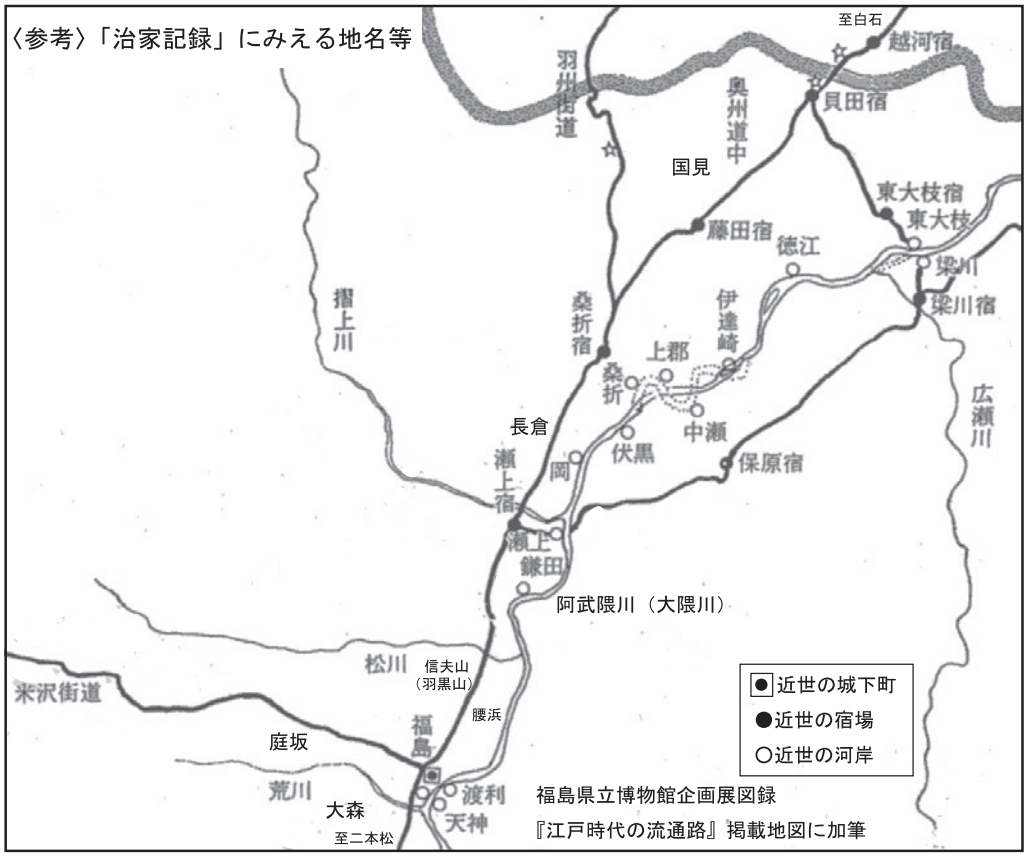
天正18（1590）年、豊臣政権による奥羽仕置においても、伊達氏の本領として一度は安堵されたが、翌年の再仕置によって会津若松城主の蒲生氏郷領に編入され、西国から移ってきた木村吉清が杉目（福島）城に配置された。その後、慶長３（1598）年からは、会津若松に移封された上杉景勝の分領となり、福島城代には本荘繁長が配置されることになった。

このような状況の中で、慶長５（1600）年を迎え、上杉景勝討伐のための徳川家康の出陣、石田三成ら反家康勢力の大坂での挙兵、家康の上杉討伐中止と反転西上という経過を経て、同年９月15日の美濃関ヶ原の戦いに至ることになる。この間、南奥羽では、家康に呼応して米沢城主の伊達政宗、山形城主の最上義光らが、反上杉勢力として軍事行動を起こした。同年７月、政宗は上杉領であった刈田郡の白石城（宮城県白石市）を攻め取っている。

９月15日に美濃関ヶ原で戦闘が行われている頃、直江兼続率いる上杉氏の軍勢が、最上氏領内に攻め込み、戦闘が起きていた。政宗が靡下の留守政景らを最上氏の援軍として派遣する中で、９月末頃に関ヶ原での家康方の勝利が伝えられ、上杉軍は撤退を始める。それとともに最上へ派遣した伊達の援軍も一部帰還を始めた。

上方や山形方面の情勢が刻々と推移する中で、政宗は10月３日付けの書状の中で「伊達筋へ一調義」（桑折点了斎宗長宛て伊達政宗書状　『仙台市史』伊達政宗文書1086　以下『仙台市史』と略記し番号を示す）、「今度南口へ働」（大町治部少輔頼隆宛て伊達政宗書状写　『仙台市史』1087）など、伊達郡・信夫郡方面への出陣を周囲に伝えるようになる。そして10月５日に政宗は北目城（宮城県仙台市）から白石城へ進み、６日には国見（福島県国見町）に陣を張った（石川大和守昭光宛て伊達政宗書状「治家記録」慶長５年10月５日条に取意文、『仙台市史』参考40）。

「治家記録」が記す10月６日の一日の状況をあらかじめ見ておくと、政宗の軍勢は国見から南下して、信夫郡の福島城を目指し、途中の桑折（福島県桑折町）、長倉（福島県伊達市）・瀬上（福島市）などで上杉方の軍勢と戦闘に及んだ。また、後に詳述するように、一部の部隊は、西側の山際を南下して、庭



〈参考〉「治家記録」にみえる地名等

坂・大森（福島市）方面へ進んだ。一方、阿武隈川の東側、伊達郡の梁川城（福島県伊達市）には上杉方の須田長義が配置されており、この方面への備えは片倉景綱・高野親兼が担当した。政宗は本陣を信夫山付近に構えて福島城を攻めるが、戦闘は続行せず、一部の兵を残しながら、その日のうちに国見へ帰還した。

なお、この日の戦いは一般に「松川合戦」と呼ばれ、上杉方の記録や軍記の中には、慶長６年４月に行われたと記すものもある。しかし、慶長５年10月６日に戦いがあったことは、「治家記録」の他、上杉方の記録の中にも確認されており、そのことを疑う必要はないと考える（『福島市史』他）。

２）10月６日条の構成と編さん材料

「治家記録」10月６日条は長文であるが、まず出陣、戦闘の布陣について記し、次に具体的な戦闘の展開、複数の部隊に分かれルートを変えて攻め込んでいく状況を詳しく書いている。そして最後は、帰陣とその後の状況にまで及んでいる。信夫山（羽黒山）に関する記事が出てくるのは、おもに戦闘の展開の部分である。

「治家記録」の編さん時に引用・参考にされたのは、仙台藩主伊達家伝来の文書や記録・系譜の他に、藩士の所持する文書や記録にも及んでいた。そのような編さん材料にも留意しながら、ここでは条文全体を適宜分割しながら検討したい。

①「六日丙子、未明丑刻、片倉備中陣所ヨリ書状ヲ献ス」（「治家記録」479頁）以下の部分

出陣直前の出来事を記した部分である。伊達氏の重臣である片倉備中（景綱）より政宗のもとへ深夜に書状が届けられ、梁川城内から伊達方への内通者（横田大学）があり攻撃の好機であることを告げてきた。しかし、政宗はすでに軍勢を桑折方面へ出陣することに決めていたため、今日の攻撃はできない旨を景綱宛ての書状で伝えている。

この部分は、「治家記録」が全文を引用している10月６日付け片倉備中宛て政宗書状に依拠して記事が書かれている。この政宗書状（消息）の原本は確認されていないが、近世に片倉家に伝来し、「政宗君記録引証記」二十（「治家記録」編さんのため文書や記録、家臣から提出された由緒書などを集成したもの、以下「引証記」）に収録されている（『仙台市史』1089）。

また、近世に白石城主となった片倉氏は、当主の事跡をまとめた家史「片倉代々記」を編さんしている。初代景綱から三代景長までの系譜は、片倉氏四代村長が家士本沢大節に命じて編纂させ、貞享３（1686）年に完成した。本沢大節は、「治家記録」編さんにも関わっていた（以上、「片倉代々記」解題及凡例）。

10月６日付け政宗書状は、現存する「片倉代々記」（仙台市博物館蔵）にも引用されており、記事の内容も「治家記録」とほぼ重なっている。この部分の「治家記録」の記事は、片倉氏に伝来した文書・記録などを編さん材料としていたと考えられる。

②「公、白石城御出陣、伊達郡国見山ニ御本陣ヲ備ラル」（「治家記録」479頁）以下の部分

政宗の白石出陣を記し、伊達方の福島攻めの布陣を記した部分である。

前日に「諸備之次第」について指令があったと書かれているが、「治家記録」10月５日条には、片倉景綱宛ての政宗書状（『仙台市史』1088）、石川昭光宛ての政宗書状（『仙台市史』参考40）が引用され、一番から五番までの布陣が知られる（二番手に片倉景綱）。ただし、片倉景綱と高野壱岐（親兼）は、梁川方面への対応のために、布陣からはずされ、当日の布陣は以下のようになった。

先手：茂庭石見綱元・同嗣子主水良綱
二番：屋代勘解由兵衛景頼
三番：桑折播磨宗長入道點了斎
四番：石川大和殿昭光

その他に、大小三十の「圓居」すなわち部隊があり、一部は伊達郡藤田から分かれて、西の山際を通って村々を焼きながら、福島の西南の庭坂・大森方面へ進んだ。この作戦には、福島と会津や米沢との連絡を遮断するというねらいがあったとする。

なお布陣については、伊達家文書の中に「伊達政宗最上陣覚書」と呼ばれる史料が二通ある（『大日本古文書』家わけ三708・713）。表題の通り、最上への援軍に関する史料であるが、その中には10月６日の「宮代」での合戦（「宮代表御合戦」）に転戦した時のことも記録されている。これらも「治家記録」の編さんと関わりのある史料であろう。

ところで、「治家記録」には「石見・備中・勘解由兵衛三圓居ノ人数凡三千余人アリ」とあるが、これは前記した「伊達政宗最上陣覚書」にも見えている数字である。問題は、その後の部分で「勘解由兵衛圓居ニハ、御給主馬上三十三騎・与力馬上二十騎・自分馬上二十一騎・野伏三十九騎」と続き、屋代景頼部隊のことだけがとくに詳しく書かれている。この理由について、「治家記録」は割注部分で「此外諸圓居人数記録伝ハラス、石見・備中圓居人数、委キ事ハ不知」と説明している。すなわち茂庭・片倉部隊の詳細がわからないのは「圓居人数記録」が伝わっていないためであり、裏を返せば、屋代部隊

の「圓居人数記録」だけが編さん時に残っていたというのである。

その後に続く部分でも、屋代部隊については、「御旗本」より濱尾右衛門行泰入道漸斎・黒沢豊前義任・白石主膳綱信の三名が派遣されたことや、馬上・長柄・弓・鉄砲の数まで詳しく書かれている。そして「馬上氏名、役付及ヒ面々指物ノ紋等マテ記録アリ」とし、繁雑になるので省略したとも書いている。屋代部隊の編成を記す「圓居人数記録」については、原本の所在を確認していないが、詳細な内容であったことは疑いなく、それが当日条の編さんの重要な材料のひとつであったことが確認できる。

③「信夫郡福嶋表ノ敵兵、　公、桑折表ニ御出張ノ由ヲ聴テ、桑折町マテノ間処々ニ出向テ相備フ」（「治家記録」481頁）以下の部分

上杉方の兵を追いながら、桑折から福島まで進軍する経過を記した部分である。長文ではあるが、よく読むと政宗の動向を記す部分は意外に少ない。おもに、先陣を務めた石見（茂庭綱元）と二番手の勘解由兵衛（屋代景頼）、とくに屋代氏の家臣（「家士」）の活躍が書かれている箇所が目に付く。たとえば、後半の部分には「凡ソ勘解由兵衛手ニ於テ高名ノ者」として15名程の人物の名前を掲げ、「首数都合八十九討捕ル」とある。前述した「圓居人数記録」と同一かは不明だが、やはり屋代氏に関する合戦の記録（戦功書き上げのようなものか）が、この部分の編さん材料にあったと推測される。

屋代氏は、「伊達世臣家譜」（巻十五　平士之部）によると置賜郡屋代を本拠として、香山公（尚宗）の頃から伊達氏に仕えるようになった。景頼は、慶長5（1600）年には、白石城攻めに続き、福島瀬上攻め（「瀬上福島之役」）で戦功があり、政宗より盃を賜わった。また朝鮮出兵等による留守中の家政を託され、「親書」（政宗書状）を賜ったという。しかし、慶長12（1607）年に処罰されて一時禄を失うことになる。その後、子孫が伊達家臣として復帰し、元禄年間には先祖の由緒を藩に申告して、百石を加増されている。

この部分については、他に先陣の茂庭氏の記録等も使われた可能性もあるが、今回は確認できなかった。

④「此日片倉備中ハ、大隈川ニ傍テ、大條・大窪・徳江・伊達崎ニ懸リ、桑折表ヘ打出タリ」（「治家記録」485頁）以下の部分

ここから視点が移り、その他の部隊の動向に叙述が変わる。まず伊達郡方面に配置された片倉備中（景綱）が、屋代景頼に遅れて福島へ攻め込んだ。「片倉代々記」にも、ほぼ同様な記述がある。なお高野親兼の動向は不明と書かれている。依拠する記録がなかったのであろう。

次に西の山際を進んだ部隊の戦果と、福島の町を攻撃した砂金氏と、その家士高梨氏の戦功に関する記事になる。前者の内容は、後述する中島宗勝宛て政宗書状に見えている（『仙台市史』1090）。砂金氏については、別の戦功書き上げなどに拠っている可能性があるが、確実なところはわからなかった。

⑤「公、御本陣羽黒山ノ麓ヘ、片倉備中ヲ召寄セラレ、城中ノ様子ニ依テ、御人数ヲ引揚ラルヘキ哉ト仰セラル」（「治家記録」486頁）以下の部分

政宗が軍勢を引き揚げることを決定し、撤収が進められる状況である。撤収を決定する場面に片倉景綱がおり、「片倉代々記」にも同様な記述がある。合戦の死傷者について、上杉方では「武頭五人」すなわち桑折図書・安田勘助・北川伝右衛門・布施次郎右衛門・武田弥之助であり、その他に馬上百騎とする。この五名は「伊達政宗最上陣覚書」にも見えている（『大日本古文書』家わけ三708）。伊達方の死傷者では、片倉備中家士国分外記のみを挙げているが、この部分の割注に「此外ニ馬上ノ士討死セシ者不伝、勘解由兵衛圓居委細ノ記録アリトイヘトモ、討死ノ者見ヘス、士ニハ討死ナシト見ヘタリ」とあり、屋代部隊の詳細な記録にも馬上の侍の死傷者は見えないと書かれている。

なお、これに続く津田民部（景康）の部隊に加えられた舟山伊賀の熊皮と熊手を強調した甲冑の装いに関する記述は、独立したエピソードの感があり、別に出典がありそうである。

次に上杉方の動向として、福島城に拠る本荘氏が籠城戦を覚悟する状況が書かれるが、この部分は、割注に「敵軍始末ノ義、大略、雑賀小平太子壽悦説ニ拠テ記ス」とあるように、また別の記録に依拠している。

最後に、宮崎内蔵助旨元が、梁川城の須田大炊の配下の車丹波に討たれ、伊達方の幕などが奪われたという記事がある。典拠不明だが、異説もあったようで、編さん者は「両説不決」という立場を取っている。

⑥「公、福嶋表ヨリ国見山ヘ御帰陣ノ時、摺上河原ニ於テ諸備頭及ヒ武頭ノ輩マテ召集メラレ、屋代勘解由兵衛ヲ召テ」（「治家記録」487頁）以下の部分

伊達方が帰陣する途上での論功行賞の記事である。屋代景頼が、政宗と盃を交わすという破格の栄誉に預かったことが書かれる。

次に、西の山際を進軍した中島左衛門家勝（宗勝）が、福島城から会津へ派遣された上杉方の使者を捕捉し、二三人を討ち取ったことを賞されて御書を賜

ったことを記す。この部分は、「治家記録」が引用する10月6日付け中嶋左衛門宛て伊達政宗書状の内容に依拠している（『仙台市史』1090）。この書状は、「引証記」には「塩長五郎所持」とあることから、江戸時代には中島家を離れており、伊達家文書に含まれていた（『大日本古文書』家わけ三717）。また、この書状には、この日の戦果として、敵兵「三百余人、此内馬上百騎計」を討ち取り、「福嶋之虎口江追入、無残所手際ニ而、国見江打返陣取候」という状況も書かれており、前掲⑤の部分も含めて当日条の記事全体の骨格となるような編さん材料ということができる。

⑦「今夜、景勝家臣藤田能登家士斎藤兵部ト云者、密ニ内通シ」（「治家記録」488頁）以下の部分

合戦終了後、景勝家臣の内通者や、再度政宗が福島を攻めた際に味方につく申し出があったことを伊達成実が報告したこと、一方で再度の福島攻めを諫める進言を石川昭光がしたこと等が書かれている。いずれも依拠した記録などは不明である。

以上、10月6日条の記事を、内容から適宜分割し、とくに編さん材料となった文書・記録に留意しながら検討してきた。これらを踏まえて、次に信夫山に関する記事を見てゆこう。

3）信夫山に関する記事

A「石見、軍旗ヲ進メテ追懸ケ、勘解由兵衛モ相継テ、押懸ル、長倉町ヲ過ル折節、福嶋羽黒山別当寂光寺法印慶印、其俗姓田村殿譜代ノ由緒アルヲ以テ、

当家ニ忠義ヲ致スノ志アリト稱シ、勘解由兵衛陣前ヘ馳来テ、瀬上ノ敵ノ様子ヲ具サニ告報ス、瀬上ニハ、景勝家臣小田切安芸ト云者、此所ノ主宰トシテ、兼テ屋敷ヲ構テ居住ス、此節、当所ノ者共近辺ノ稲ヲ刈居タリ」（下線は筆者、以下同じ）

全体の構成では③の一部である。上杉方の兵を追って茂庭・屋代両氏の部隊が福島方面へ向かう途上、長倉町付近で、「福嶋羽黒山別当寂光寺法印慶印」という人物が屋代景頼のもとへ駆けつけ、伊達方に忠義を尽くす意志があり、その先の瀬上近辺の敵方の情報を告げてきたという内容である。前述したように、このあたりの記述は、屋代氏に関する記録を編さん材料にしている。よく読むと、慶印が駆け込んできたのは「勘解由兵衛陣前」とされており、この部分も、屋代氏関係の記録に含まれていた可能性が高い。

B「葉武者共ハ本道ノ西、羽黒山ノ方或ハ本道ノ東、腰野濱ノ方ヘ逃去ル、腰野濱ノ方ヘ逃タル敵ハ、多ハ逃退テ、福嶋ヘ引入ル、羽黒山ノ方ヘ逃タル敵ヲハ、多クハ討捕ル、此筋ハ、荒井屋敷ト云フ處マテ追留ム、佐々木八蔵、羽黒山ノ方ヘ逃行敵ヲ追懸ケ、物付スル處ニ、庄司隼人是ヲ見テ、馬ヨリ引落シ、勝負セヨト辞ヲ懸クレハ、頓テ引落シ、首ヲ取ル」

福島方面へ逃亡する上杉方の軍勢が、奥大道（奥州街道）からはずれて、西の羽黒山方面と、東の腰野濱（腰浜）方面へ進み、羽黒山方面に逃れた者の多くは討たれたという内容である。

この部分も③の一部である。庄司隼人については、別の部分に屋代景頼の家士（馬上）、佐々木八蔵については隼人の寄子と、それぞれ書かれており、いずれも屋代景頼率いる部隊の一員である。この部分も屋代氏関係の記録に依拠していると思われる。

C「敵兵悉ク福嶋ヘ逃入ノ後、　公、羽黒山ノ麓、黒沼神社ノ邊ニ御本陣ヲ備ラレ、首級ヲ實検シ玉フ、濱尾漸齊御側ニ伺候シ、披露ス」

福島城へ敵を追い込んだ政宗は、羽黒山麓の黒沼神社付近に本陣を構えて、首実検をしたという記事である。

この部分も③の一部である。政宗の側に伺候して首級を披露する役を務めた濱尾漸斎（右衛門行泰入道）について、別の部分には屋代景頼に差し添えられた旗本の一人と書かれている。やはり屋代部隊とともに行動していた人物で、これも典拠は屋代氏関係の記録であろう。

D「此日片倉備中ハ、大隈川ニ傍テ、大條・大窪・徳江・伊達崎ニ懸リ、桑折表ヘ打出タリ、敵出張ノ様子ヲ視テ、彼等城ヲ離テ出ル事ハ、定テ手術アルヘシト思ヒ、羽黒山ノ邊、心元ナシト、静カニ福嶋表ヘ押行ノ處ニ、敵兵既ニ勘解由兵衛ニ追崩サレ、福嶋町マテ引入タリ」

政宗が羽黒山付近に本陣を置いたため、その身を案じて、片倉景綱が福島方面へ進軍したという記事である。全体の構成の中では④の一部で、片倉氏の記録に基づく可能性が高い。

E「砂金右兵衛實常、数十騎ヲ率ヒ、羽黒山南ノ麓ニ張陣シ、福嶋町ノ内ヘ鐵砲ヲ撃入ル、因テ出向タル敵兵、悉ク城中ヘ引入ル、右兵衛見テ鐵砲ヲ止メ、人数ヲ整ヘ備ル處ニ、敵兵又西口ヨリ打出テ、右兵衛備ニ攻懸ル、然レトモ手痛ク斬立ラレテ、又逃入ル、右兵衛家士高梨丹波ト云者、下人一人召具シ、打出、敵二人ニ出合ヒ、一人ヲハ丹波討取ル、一人ヲハ、下人撃テ傷ツク〔其外高名等ノ者不知〕」

砂金實常が羽黒山南麓に陣を張り、福島城や町に向けて攻撃に及んだという記事である。同じく④の

一部であるが、砂金氏関係の記録に拠ると思われるが、詳細は不明である。

F「公、御本陣羽黒山ノ麓へ、片倉備中ヲ召寄セラレ、城中ノ様子ニ依テ、御人数ヲ引揚ラルヘキ哉ト仰セラル」

本陣を張る羽黒山麓で、政宗が片倉景綱を呼び寄せ、福島城への攻撃を中止し引き揚げを命じる場面である。全体の構成では⑤の一部であり、片倉氏関係の記録に拠っている可能性が高い。

「治家記録」慶長５年10月６日条に見える信夫山関係の記事は、以上の６件である。大きく分けると、Ａ羽黒山別当の慶印が伊達方に味方したことと、Ｂ～Ｆ羽黒山の南麓に政宗が本陣を置き、福島城や町に向けて戦闘が行われたという内容である。

前者（Ａ）については、屋代氏関係の記録に依拠しているらしいことを確認できた。しかし、記録自体を確認できていないこともあり、内容の信ぴょう性などを、これ以上検証することは難しい。一般的に考えて、屋代氏の戦功を認めてもらう目的で作成された記録であったとすれば、いわば脇役に当たる羽黒山別当などの記事には、無理な作為などは加えられにくいといえる程度であろう。

この記事によると、羽黒山別当の慶印は、法印という僧位をもち、その出自は三春の田村氏譜代の家臣に連なる者であった。慶印については、今のところ、これ以外の史料を確認していないため、これらの諸点の詳しい検証も、今後の課題とする他ない。寂光寺は、開府後に仙台へ移るので、そこに伝わった縁起や記録などについても調査を続けていきたい。

後者（Ｂ～Ｆ）については、屋代氏・片倉氏・砂金氏など複数の記録に書かれていたと推測される。政宗本陣の位置について、「治家記録」の編さん者が、記事の統一を図った可能性もないわけではないが、伊達家中の中で共有できる記憶であったと考えておきたい。

黒沼神社は、信夫山の南麓に位置している（前号掲載の「御山村絵図」などを参照）。この付近に政宗が陣を張ったとすると、信夫山一帯は、その軍勢を受け入れて、背後を固めるかのような役割を果したと考えられる。

別当を中心に羽黒山が、政宗の軍勢に味方し、本陣を信夫山付近に置くことになった背景とは何であったのだろうか。

「治家記録」を通してみると、この時の合戦において、伊達氏の旧領であった伊達郡・信夫郡の住人・百姓らの中に、進攻してきた政宗の軍勢に対して、味方する動きが広がっている。

・上杉方の米沢からの援軍である大関・芋川氏の軍勢に対して、伊達方に味方する「庭坂ノ土民等」が攻撃を仕掛けた（「治家記録」481頁）

・福島住人佐藤縫殿助が、「御譜代ノ筋目アルヲ以テ」福島への道案内を務めた（「治家記録」482頁）

・６日夜に景勝家臣藤田能登が内通し、馬上・鉄砲とともに「信夫・伊達両郡ノ百姓等四千人」を誘い、さらに福島町の検断・問屋・山伏・町人等が橋を落して、政宗が再度出陣した際には忠勤に励むと伊達成実を通じて申し入れた（「治家記録」488頁）。

これらの事例を参考にすると、羽黒山についても、伊達氏が信夫郡を支配していた時代から何らかのつながりがあり、それが政宗の進攻によって呼び起こされたと考えることができるのではないだろうか。ただし、伊達領時代に信夫山と伊達氏とのつながりを示す具体的な史料は、今のところ見つかっていない。この点についても、今後の課題である。

引用・参考文献

・福島市　1972「松川合戦」（大竹正三郎執筆）『福島市史』第2巻　近世１（通史編２）
・梅宮茂　1987『覆刻版　西坂茂　信夫山』蒼樹出版
・福島県立博物館　1988　企画展図録『江戸時代の流通路』
・高橋充　2009「直江兼続と関ヶ原合戦」矢田俊文編『直江兼続』高志書院
・高橋明　2010「会津若松城主上杉景勝の戦い・坤－奥羽越における関ヶ原支戦の顛末－」『福大史学』81
・本間宏　2011「福島合戦の諸問題」福島県文化振興事業団編『ふくしま発信　直江兼続と関ヶ原』（後に改訂新版『直江兼続と関ヶ原』2014　戎光祥出版）

史料

・「伊達家文書」:『大日本古文書』家わけ三　東京大学出版会　1908年
・「伊達世臣家譜」:『仙台叢書　伊達世臣家譜』仙台叢書刊行会　1937年
・「貞山公治家記録」:『仙台藩史料大成　伊達治家記録』二　宝文堂　1973年
・『仙台市史』資料編11　伊達政宗文書２　2003年
・「片倉代々記」:『白石市史』４史料篇（上）1971年、白石市文化財調査報告書47『片倉小十郎景綱関係文書』2013年